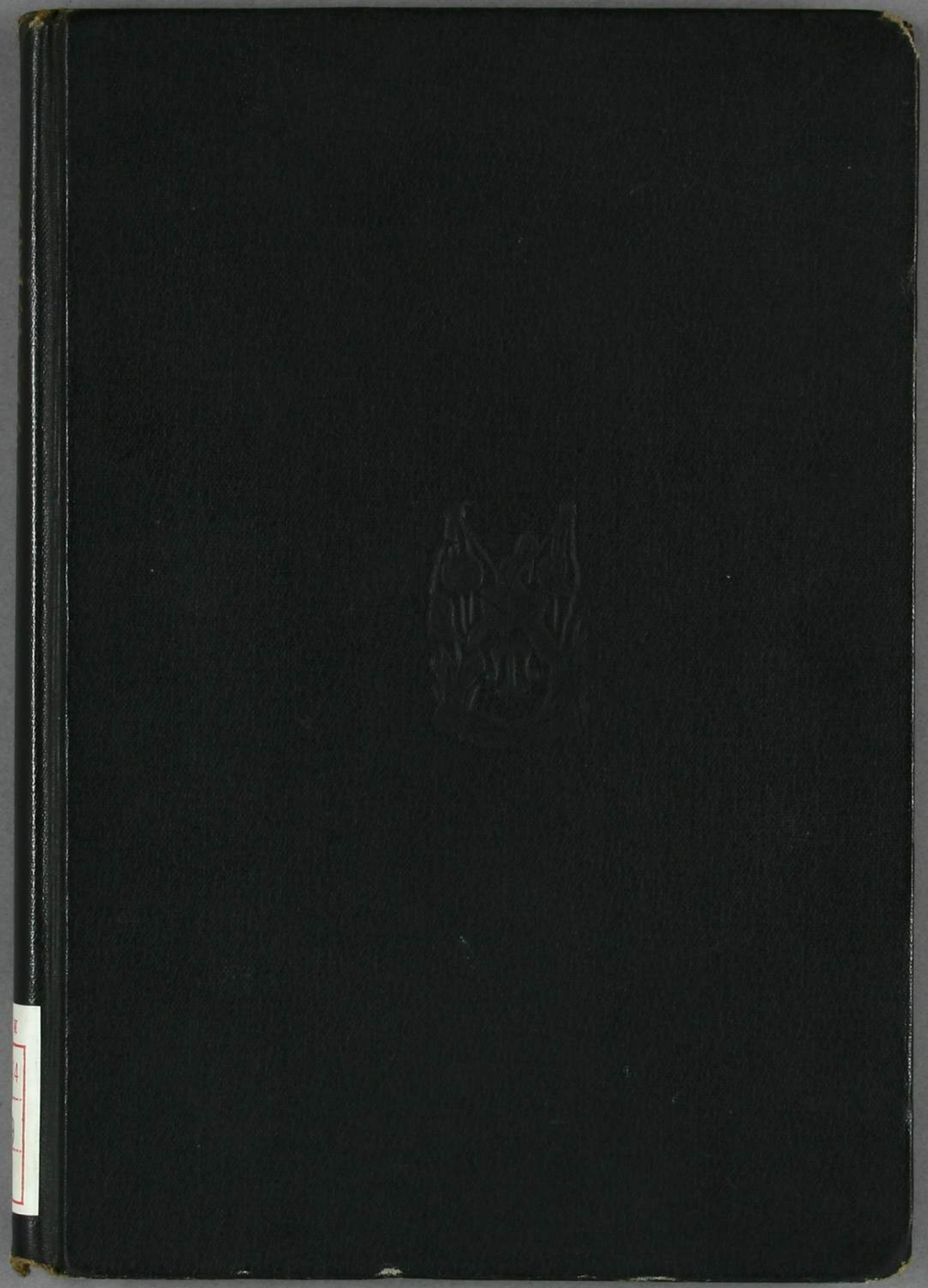
東海游吟

土井晚翠著

本
文
D

東海游草 吟

本間文庫
文庫 14
D 209



東洲俊吟

土井晩翠著

文庫14
D209

東海遊子吟

あけぼの　一
松島　二
亞細亞大陸回顧の歌　五
瑞士　一三
佛蘭西　二五
土耳其　二六
日本の女性　二八
ブルヂェ湖畔月夜の曲　二九
アルノウ　三三
フローレンスの遠望　三五

セイヌ江上の別離　三八
タオルミナ希臘劇場古跡　五六
カムパニヤの大野　六三
司馬子長名山藏書歌　七一
懷郷　八五
『ノートルダム』　九三
『ミロのヱーナス』　九五
哀歌　一〇八
羅馬郊外にシェリーの墓を訪へる後
モンテ、テタスチョの丘に登りて　一二六
羅馬カンパニヤの『クオ、ワーデス』寺院　一三〇

深夜　一三四
永劫の戀　一三五
『愁』　一三七
凱旋　一三八
ドナウ江上の吟　一三〇
サレブ峯頭の吟　一四三
ライプチヒ郊外ナポレオン紀念碑　一五四
バイロン　一五九
歐羅巴大陸回顧の歌　一七四
附錄　光榮の追想　一九五

挿畫

中村不折畫　凸版印刷合資會社製版印刷

雪山の麓恒河の上

瑞士

フローレンスの遠望

クロヂオの大水道

希臘遺跡

ミロのヱーナス（ホトグラビヤ版）

奈翁終焉の古跡

エトナ山

あけぼの

金鷄あしたの消息寄せて
ひんがし靉く紫雲の粧
天風無限の愛より吹きて
あゝ今世界は新に生る。

恒星惑星胎より出でゝ
虚空の途踏むこの日のあした、
たてたて、天地の正氣を吸ひて
行くべきわが道無窮のあなた。

松島

仙府むかしのあこがれを
傳へてこゝに二千年、
東海の上扶桑の端
並びて呼びあふ八百の島。

あすは萬里の外の旅
故園なごりの姿をと
誘ふは有情の波の聲、
起ちて、落つる日雲染めて
海黄金を溶す時

大高森の頂に。

頂高く今も見る
眞なるもの美なるもの
おほいなるもの常に新、
左太平洋の波
散るは奔馬の狂か、
右や一灣松島の
沈静さながら夢の如。

あゝ色ありておほいなる
生ける詩何のかたどりぞ、

あゝ彼人生の活働の、
あゝ是心境の平和の。

＊松島の四大觀とは富山、扇谿、多門山及び大高森を指す、そが中にも擢でて特に夕暮天地の大觀を極むるは大高森なり、こゝに上らでは眞に松島を見たりと曰ふべからず、この勝地に遊ばんとする人々の注意に特に、斯く。

亞細亞大陸回顧の歌

天上玉京の星の文
靈の有象に凝る姿、
染めし黃金の筆のしづく
拂ひて銀河の波捲ける
詩神いま世に愛の羽に
おりていづくに潜めるや、
崑崙の嶺あけぼのゝ
花を啣みて露に醉ふ
仙鶴あらたに羽をのして
求めん扶桑東海の

郷離れきて八千里、
夢魂夜毎に歸り來る
滄溟はるかに見返せば
極浦互に空遠く、
亞拉比亞の海あら波の
山より高く起つところ、
紅海の夕花のごと、
あらしに魚の飛ぶところ、
過ぎて蘇士の長江の水
舳艫啣んで舟百千
帆檣林の立つを見る
埠頭をこゝにのちにして

亞細亞の空に別るゝよ。
西シリアの漠のはて、
東扶桑の日の光、
南コモリンの燃ゆる海、
北ベーリングの氷る波、
包みて方里二千萬、
大瀑千仞の崖落ちて、
千流萬波を開くごとく、
曙光の一線東に照りて
天地姿をかふるごとく、
こゝに人類その生はじめ、

こゝに邦國そのもと起し、
こゝに文明その端開く、
おほいなるかな亞細亞の土、
その空その陸今なごり——
時か暮天の汐滿ちて
白帆高く風はらみ
鐵輪波をつんざきて
今地中海に入る處、
船欄しづかに身をもたせ
見れば夕の色染むる
雲は幾團羽かろく
思をこめてたゆたひつ、

眸(ひとみ)を右に轉ずれば
青綠かすかに點じ得て、
黃砂の遠く天に入る
地は阿非利加の大漠か、
のちは綠の光濃く
千水萬波うねり布き
嵐も青き歐の天。

三大陸を前に後に
海は萬古の聲よどみ
一水一波こゝ
歷史の色に染むところ、

古今の潮鳴りひゞき
東西二洋文明の
流の混じよるところ、
東海の遊子まのあたり
眺めておもひ無からむや、
行雲しばらくたゆたひて
いま塵界の子に語れ、
長風海濤無絃の琴に
不敏の子にいま思を寄せよ。

天地剖判の夢はるか
人類こゝに生をうけ

時移りゆく数千劫、
中央亞細亞の山河のほとり
原人こゝに半裸のすがた、
泉地胎を溢れいで
流れを四方に引くごとく、
其水に沿ひ草を逐ふ
筋骨鐵より猶堅く、
長槍大弓身に帶びて
幕を収めて牧を驅る
百千の群漠わたり、
青林ゆふべの月落ちて
篝火の光沈むとき

聞くは猛獸夜半の叫び。

曙光ふたゝびほのめけば
露を拂つてたちあがる、
連山ひとみを遮りて
たゞ青雲の遠き見る
轉々の旅幾千里、
東印度の大沃土
西紅海の岸の波、
部落おの〳〵居を定め
炊烟霞みて森淡く
雞犬あしたの風に鳴き

牛羊夕の野に群れて、
花の砂漠に點ずるに
似しや民また處々の春。

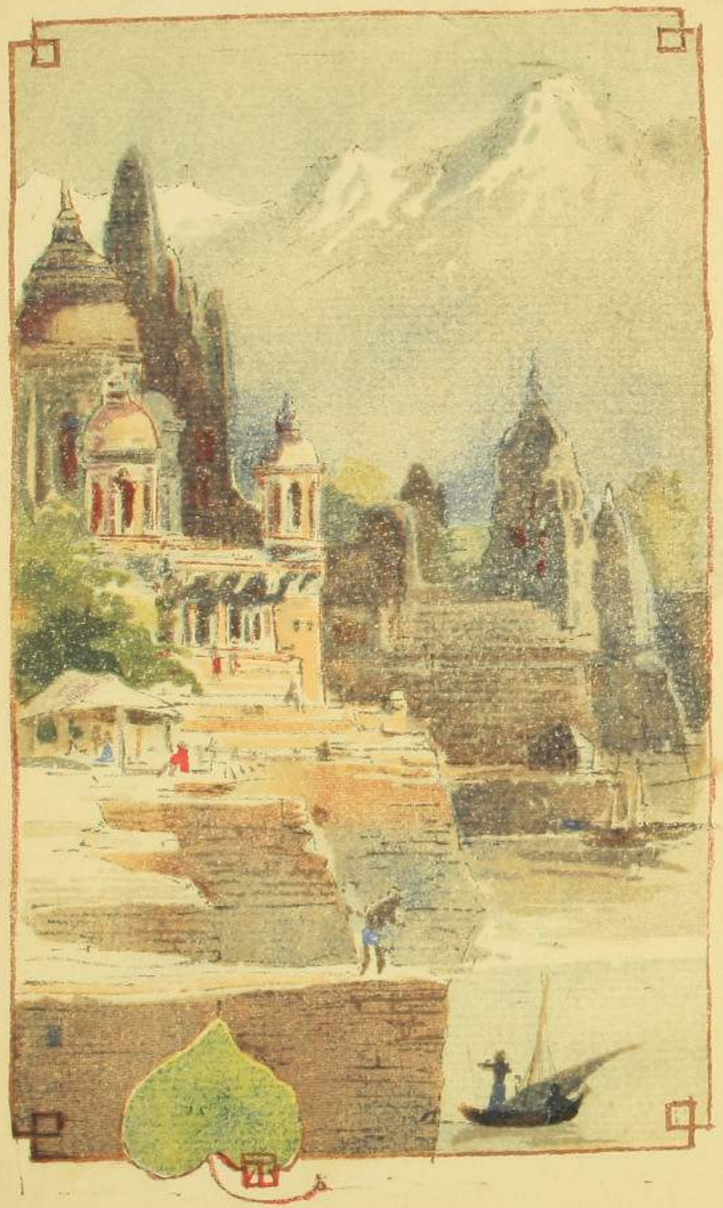
世は過ぎうつる數千載、
海洋こと〳〵く途となり
輕舟飛んで葉の如く、
風暖かに波ぬるむ
南歐の岸花咲きて
春は次第に巡りゆく。

更に東の運命を

思ふ百代よゝのあと、
あらし叫んで雲黑く
運命の神怒の矢
雨より去げく降らすに似しや、
鐵騎は黑龍の水渡り
旌旗は烏拉留の雲拂ひ、
雄圖四海を掩ふべく
歐亞の山河ゆるがせし
『汗中の汗』後いかに、
かれには篝火天を燒く
十萬の軍波のごと、
大都守りを失ひて

城壘のあらし旗高く
弦月新たに照りいでし
その興廢も春の夢。

天張り雲捲き星懸かる
此陸光榮に滿ちし場、
滿堂の絲竹聲やみて
客ことゞく散じ盡き
紅燈光を失ひて
暗の四方より迫る如
列邦の姿今いかに、
鳥は愁に醉ふて啼く



春か十二の玉の欄
鳳笙錦曲花散りて
黄河の岸の民四億
長夜の眠さめやらず、
雪山の麓恒河の上
雲に聳ゆる三千の
金光まばゆき大伽藍、
大聖親しく法を説き
普ねく衆生を度せし場、
山は恨を染めなして
二億の臣妾たゞ紅涙、
大陸廣く見わたせば

方里數ふる二千萬
皆凄涼の秋の風。

『天の恩寵たゞこゝに
文明獨り我の權、
あらし枯葉を捲く如く
異邦異色の民族を
脚下に踏んで白人の
惠四海に及ばん』と
歐の中原呼ぶは誰そ、
教をかりて禍の
種を四海に播かんず

私慾の權化威のあらび、
曰ふや膝つき首たるゝ
八億亞細亞の洲の民
來りて帝座にひれふせと、

見るたゞひとり東海の
扶桑の山河畫の如く
天地の正氣凝るところ、
神武神聖のわが皇祖
基をおきて二千載、
桃源の夢長うして
さめてあけぼの波清く

萬邦の潮よる處、
誰が呼びそめし君子國
時なるかなおほいなる
運命なんぢの手を待てり、
あした櫻のくれなゐの
露を薔薇の花に添へ、
明鏡互に相照し
寶珠こもゞ相含む
東西ふたつ文明の
光をこゝにまじへ來て
民ことゞくく生ける詩と
普天のもとにたつはいつ。

おほいなる世の魂の聲
返響遠く東より
西より北より南より——
春風吹きわたる大東の海、
千萬の流むらさきの
嶺のあなたの花を帶び、
注ぎて微妙の樂湧きて
曲はあはんか愛の歌、
其とこしへの望より
こゝに一絃胸の琴
掬きしらべ君許せ。

脚下に轟く波遠く
思を扶桑の空にはこべ、
風また吹きて八千里
わが聲はるか故山の友に
寄せよ湘南夏の夕、
靈火の焔身を燒きて
聲九皐に絶たざりし
白鶴汀に病むところ、
晃山の麓花謝して
風に臨んで才人の
しづかに春を忍ぶ處、

東臺のもと漣漪の水
湖亭のゆふべ手を握る
友また二人、交りの
道秋蘭のかんばしく
花よりにほふともしびの
もとに斯文を說くところ——
行きてわが聲遠く寄せよ。

あゝ今行雲何の情
搖曳の影何の思
行雲なんぢに思を托す、
行雲去りてわれ言葉なく

船またしばらくも留らず、
帆は飄蓬の風はらみ
滊笛は長く波に呼び
黑烟空にたなびきて
亞細亞の大陸あゝさらば別れむ。

（明治卅四年七月）

瑞士

『アルペンホルン』の返響高く
嶺より夕に呼び來るところ
綠の草踏む身がるの牧兒
牛羊うちふる鈴のね添へて

あ、聞け彼等は自由を歌ふ。

オーベルランドの氷河のなごり
谿間にしづくの集るところ
流のしみづを、掬みとる織婦
岸のへほ、ゑむ野花を戀ひて
あ、聞け彼等は共和を歌ふ。

ラインの大瀑あらしを卷きて
虹霓夕にかゞやくところ
耕耘終りて歸れる農夫
紫雲に消行く高ねに呼んで

あ、聞け彼等は祖國を歌ふ。

佛蘭西

城下の盟の耻辱に泣きて
戰後の經營日夜にやまず
巨萬の黃金期ならず積みて
姦雄悔ありライインのあなた
あ、民耻知るセイヌの岸の。

友愛、平等、自由の三語
刻める樓上三いろの國旗
回復一念焔と燃えて

アルサス、ロレーン』の名をみな口に
あ、民勇ありセイヌの岸の。

シャンゼリゼイのへ夕にたちて
凱旋門上入る日をのぞみ
偉人の不朽のほまれを戀ひて
思を金馬の姿にやるか
あ、民情ありセイヌの岸の。

土耳其

アドリヤノープル弦月落ちて
鐘聲悲む『ソヒヤ』の大寺

歐土の病夫よ虎狼の慾の
飽かざる大敵いかにか拒ぐ。

宦官はびこる不盡の禍害
私(わたくし)營む權家のあらび
朋黨こも〳〵其利に就きて
帝國日に日に衰へ行くを。

病は膏肓癒すに術(て)なく
ソリマン、オスマンむかしのほこり
新月しるしの旗色さめて
あ、今沈むか亡びに暗(くみ)に。

日本の女性

操は嚴冬雪ふるなかに
ほゝゑむ寒梅にほひやたぐふ、
ほまれは千尋暗なる谷に
潜める幽蘭かほりに似るか、
いさをは蒼溟波捲く淵に
輝く白玉光といづれ。

嗚呼君、見えざる無上のいさを
嗚呼君、聞えぬ至高のほまれ
嗚呼君、知れざる究竟の操、

大なる國民、君よりおこる
涙になさけに操に愛に
嗚呼君、やさしき女性の力。

ブルヂエ湖畔月夜の曲

歌やいづこ
たゞ漣にあらはれて
木蔭にひそむ
夕風の聲。

戀やいかに
大空高くすみのぼる
月たゞ照す
たへぬ思を。

さらば漕ぎ行け
一葉の小舟
むかしの城のあとのこる。
あなたの岸の片すみに
暗き聲ある片すみに。
探りて得たる何の曲

夜目にもしるくアルペンの
雪の頂(いただき)てりわたる、
月はしづかに山のはに
思の光おさめしを。

こぎ歸れ
こぎ返せ
人はむなし汀上のあけぼの
戀はふりぬ古城の殘月。

歌やいづこ
さざなみ今は收まりて

あけぼの、岸
風遂にさめず。

戀やいかに
ほのぐしらむ月かげに
さむるは遠き
あけぼの、鐘。

アルノーの夕の水
あ、アルノーの夕の水
夕日の光にほへども
詩人の春ぞ夢遠き、

むかしの戀をさ、やきし
なごりいづれの漣ぞ。
あ、ビアンカ歌へ歌へ
歌は猶身に
聲は猶世に。

あ、アルノーの夕の水
夕日の光さめはてぬ、
花のちよろづ香を吹きて
春ことぐく色なりし
世はとこしへにかへらじか、
あ、ビアンカ歌へ歌へ

曲は　なほ春
樂は　なほ花。

あゝアルノーの夕の水
霞みどりの遠山の
思の雲は今いづれ、
蘭の漿そはひんがしの
ふるきむかしの歌がたり。
あゝビアンカ歌へ歌へ
水よどむまで
風答ふまで。

あゝアルノーの夕の水
行きて歸らぬ水のごと
あすは我行くみんなみの
千年の都苔青き
石に歌あるよその岸。
あゝビアンカ歌へ歌へ
星ねむる迄
月しづむ迄。

フローレンスの遠望

雲今西に収りて
天半たゞよふ黄金の波の

最後の光消えがてに
ポプラ緑の森わけて
はるかに見ゆる萬家の府、
『カステロ、ヱッキョ』の鐘楼高く
大寺の圓蓋夕に殘る
嗚呼美なるかなフローレンス
煩悶煩惱の人の世に
ひとり自然のふところに
ほゝゑみ育つ天の寵兒、
天地はこゝに靈にして
烟るが如き丘のもと
花あり、香あり、たくみあり、

戀あり、歌あり、情ありて
『完*きもの』をこゝに見る、
見よ生命の水のごとく
白練の如く光の如く
綠の谷を貫きて
アルノーの流うねり行くを、
そのアルノーの水遠く
我また明日は雲水の
行方定めぬ旅の空、
迷の子等の惱ある
胸にとこしへ行き通へ、
神韻つねにいにしへの

朽ちせぬ花に色に香に
なごりに宿るアルノーの岸。

*『完し』とはフローレンスの謂也（テインヌ）

セイヌ江上の別離

二　人

秋十月のセイヌ河
黄ばむは岸のプラターネ
愁も清きさゞなみに
旅の姿を照らし見よ。
關山夢は遙かなる
高樓のむかし春のゆふべ

夕日彩どるくれなゐの
光慕ひしおもかげは
いたくも秋に痩せつるよ。

哲人學びのよはの窓
ともしの油つくるとも
胸に玲瓏の光湧きて
照らすは宇宙の眞善美、
心兵そゞろに空を馳せ
冥茫の極み進み行きて
秘密の門を探るごと
自然の招き辭みあへず

あした叢雲かきくもり
夕薄霧野をこむる
道はたはてしれず
歐亞の山河こしかたを
夢より淡く眺むれば
時に弦月の影くれて
古城のあとに餌をあさる
猛獅の聲に夢破れ
時に銀河の千仞の
末落しくる大瀧の
なごりの水も掬びしか、
十二の大路不夜の郷

花よりもしびの
光りに旅の影寒う、
錦城の歌吹春たけて
輕羅の粧たが戀の
紅染めしおもかげに
忍ぶは故山の花の色、
藝園はまた春遠み
盡きせぬ自然のあと追ひて
あゝまた立たむ旅ごろも、
秋やセイヌの水おもに
さらばしばしの影と影。

東の人

ナイルの岸の遠きより
四千餘年のいにしへの
おもかげ傳ふ石の碑
移りてこゝにたつ處、
きのふは『戰慄の世』の狂ひ
斷頭臺のよるに日に
血汐を吐きし『コンコルド』
今滿城の子女群れて
秋なほ春か逍遙の
姿たのしき夕の色、

大都背きて君去らば
あすは葡萄の紫の
南あなたのマルセイユ、
むかし軍鼓の轟きに
壯士髮たつ世の亂れ
急雨忽ち襲ひ來て
落葉あらしに散るごとく
よどみおこりし民の歌
歌はゞ血汐なほ燃えむ。

西の人

輕隼あらく羽たゝきて

緑の雲をとぴしのぎ
萬仞の嶺雪の嶺
嶺より高く冲いるべく
天日の影慕ふごと
是より遠くみんなみの
山河はるかに君行くか、
ユングフラウの雪白く
アールホルンの雲黑く、
おほいなる靈手を擧げて
刼初の空の暗こもる
千丈の谷底深く
氷河の途をつんざきつ、

絶崖のあらし聲高く
今なほ彼の呼ぶ處
君はた歌のなからめや

東の人

波は銀馬の空を蹴て
あらしに呼ぶに似たらむか
百代の興亡跡洗ふ
秋おほいなる地中海
渡らむ後ちの旅いづれ。

西の人

暮雲聲なく紅の

色のかすかに薄れ行く
一片風にまかせては
行方定めぬわが旅路、
四たび赤道の寰を越し
十字の星の影高き
南極の光仰ぎ見て
芭蕉の森のよるの露に
乾く唇濕ほしつ、
夜半のあらしうづまけば
大漠の夢驚きて
空に啾々の聲聞きぬ、

さらば（ゴシェンの牧の長
旭日にうたふメムノンの
岸をのがれし導きに
夜は紅血のともしびか
晝白雲のまるばしら、
そのあと迫る千兵萬騎
怒潮の狂ふさかまきに
鯨鯢の餌と失せはてし）
紅海の水過ぎ渡り
パーラ、シナイの嶺また嶺
白雲永く住む處
行く〳〵遠く顧みる

烟波そゞろに秋深く
空明高く星澄みて
潮は長し三千里、
大聖の教衰へて
民に久しく命なく
直立二萬九千尺
ヒマラヤの嶺霧深き
亡國のあとわれ訪はむ。

東の人

尼連禪河の春の波
あけぼの清く澄むところ

そらに悟りの星照りて
至聖しづかに微笑みつ、
五天焔の雲焼きて
破邪のつるぎの拔けしより
花咲き花ちる二千歳
東亞の邦の衰を
何の咎とやあげつらふ。

おさなき鳥の巣立ちして
つねに梢を思ふごと
心は東海の波のあなた、
隣邦今も夜長く

鴨頭の綠漢の水
溶々のあとととまらねど
民に久しく聲たゆる
煩悶の姿たが責ぞ、
十二帝陵露深き
銅駝の春に身を寄せよ
秦關百二やぶれては
たれか洛陽のあとをとふ。
瀛州のあと猶あなた、
花は萬朶の春霞
旭日ににほふ朝櫻、

暮は金光てり殘る
八百の島松の島、
自然の惠おほいなる
鄕試みに君よ訪へ、
甲東一たび逝きてより
秀麗の山河人はなく
今群小の咆哮に
一世の光暗くとも
祖國いつかはいましめの。
いさめの聲を聞かざらむ、
陋習ながく破り乘て
廣く世界に知を求む

おほいなる聲彼にあり、
維新の風雲暗を吹く
曙の聲消え果てじ。

西の人

東亞の光四千載
瀛西の華二千秋、
華を光を集め來て
時運のあとを育つべき
おほいなる哉邦の命
享くるに堪ふる民いづれ。
そのこしかたの世々のあと

花は光は歌は世は
詩人の戀はむかしなる
アルノウの水君去らば
南あなたの大都
雲に思のあこがるゝ
夕の空に乞ふ歌へ、
纏へる蔓は絃にして
敗墟今はた琴ならむ。

二人

雲亂れ散り亂れ飛び
水流れ去り流れ來る

離合か集散か世の姿
よし葉は黄ばみ落ちぬとも
同じ一樹の蔭にして
こゝに葡萄の香の高き
セイヌの秋の水おもに
並ぶる影のたゞしばし、
ゆふべ今はた色染むる
シャンゼリゼイの空のあなた
凱旋門の影暮れて
見よ鐵橋の四の隅
石柱高き金馬の姿
燦爛の光落つる日を

返して高き雄々しさや、
留むるも遂に留まらぬ
自由の風に羽たゝきて
天にかけなむ心の影か、
影か、あゝさは行末の
雨もあらしも光見る
望に堪へむ世々の旅

（明治卅五年秋）

*プラース、ド、ラコンコルドに埃及より移し來れる角尖塔起つ、塔はラメセス大王の功蹟を錄せるものとぞ此廣場はセイヌ河に添ひ「コンコルド」筒を隔てゝ衆議院と對し、東は「チュイレリイ」西はシャンゼリゼイに接す革命時代に斷頭臺のたちしはこゝ也

タオルミナ　希臘劇場

古跡

破壁むなしく夕に殘る、
殘りて曰はず時いづれ、
流光遠く東より
潮を染めて一千里、
金羊毛を探し行きし
比か嗚呼かれ詩美の民、
輕舟ひとたび身をよせて
深紅そめなす落日したひ
濃藍ひたせる水こぎわかち——

流るゝ花に入る月に
銀海春を夢み來て
水にこがるゝ白鷗の
つかれし羽をたゝむ如
汀上こゝに帆を卷きて
この風濤の樂を聞き
この藍光の空に醉ひ
かの清泉の淵に掬み
かの金色の菓を摘みて
紫雲たなびくオリンピア
故山はるかに一片の
春を移しゝあとかたか、

破壁むなしく夕に殘る、
名工苦心のあととむる
劇場こゝに築かれて——
雷を呼び雲に乘り
『アムブロシヤ』の香ふりみだす
十二主神のそのかしら——
あらしをおこし波に驅け
三叉の戟に威を奮ふ
海神——あるは無縫の天衣
解きて金甲身を鎧ひ
雲鬢高くつかね卷きて

明眸さながら綠の星か
光か智恵の權化の女神——
または紅頰の百の媚
といきは春風の香と化して
萬花の笑みを咲かしむる
美なる愛なるアフロデティ——
こゝに顧みならびしや。

破壁むなしく夕にのこる、
こゝに桂葉の綠りの冠
他のピンダアに歌はれし
人、わざ、ほまれ、いくそたび、

それや假想の夢にして
霞にしづむ雁がねの
途に譬へんまぼろしか。
破壁むなしく夕にたちて
たゞ曰ふかの民おほいなりきと。
春花秋月光を香を
灑ぎし撒きし世々の跡、
南浦碧の草枯れて
花に百年の齡無く
靈心圓く照し來し
月は碧海にしづみ入りて
時の嫉みか虐か

惠か殘る穹窿の
崩れしあとに獨りたてば——
時しもゆふべ紺青の
空、南歐の夏の空
寫す鏡は濃藍の
ひかりイオニヤ海の水、
烟波、思に堪へずして
風濤はるかに呼び行くは
是より南、縹緲の
紅沙の岸の亞非利加か。
近くは白銀のへりをとる

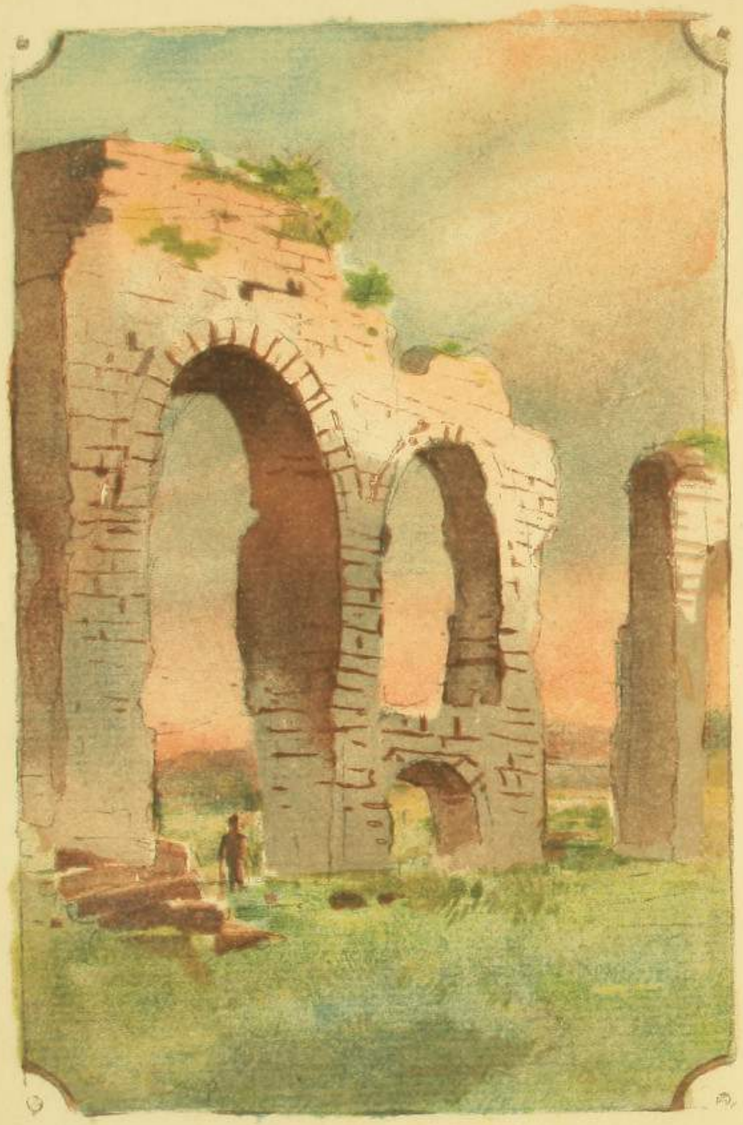
長汀曲浦の一灣のゆふべ。
その激灘の岸より起り
ゆるくゆるく遂に遠く
暮雲の冠にくれ殘る
『天の圓柱、白雪の保姆』
絃歌の始*祖の讃ずるところ
エトナの峻嶺九千尺
焔をおさめ火をつゝみ
丘陵しづかに見おろして
佇み立てり、おほいなる
靈の思想の翼疾く
ひとり群小の世の外に

高くはなれて飛ぶ姿

*ピンダア

カムパニヤの大野

綠は遠く遠く布きて
限るみなみのアルバノウ
蒼烟しづかに夕をこめて
見よ今、羅馬の落日は
聖徒の名をよぶ寺塔のあなた
入りて餘光は遠くこゝに
射るクロチオの大水道、
これやいにしへ帝國の



百萬の富威光のなごり
蜿蜒長蛇の這ふ如く
蒼茫の野に暮れ迷ひ
緣蘿をかしちに又胸に
樂を無聲にかなでいて
似たり巡禮の群幾千
もすそを長う杖により
罪に苦みに暗に泣き
ひきゐて聖壇の地に行くに。
その長壁のもとくゞる
車を驢馬に任せさりて

上に睡(ねぶり)のたけなはの
農夫の夢はいづくぞや、
あなたボリの丘の上
葡萄酒の紅の
壺の重きを載ける
村のをとめのほゝゑみか。
迷へる群にあらなくに
また見よ夕ひきかへる
姿さびしき牧の子ら
大都の花に色に香に
時の潮に遠ざかり、
雲はあしたの雨帶びて

歸る東のアペナイン
麓に終へむ運命の
姿さびしき牧の子ら
鞭を鳴して口ずさむ
歌は何等の郷音か。

それや人生、これにまた
興廢いくたび夢殘す
嗚呼綠なるカムパニヤ、
東海はるかに波浪をわけし
客衣の袖をなんぢの空に
かへす遊子の無窮の思、——

四海の水皆連なりて
六合の光相まじる
人文の流ふみわけて
とへば東亞のいにしへの
波瀾こゝにもひく潮。

秋風吹いて雲迷ひ
草木落ちて雁歸る
むかし汾上のくれの水、
錦纜牙檣波に照りて
簫鼓のひゞき風に散る
その清興の極まりに

遂に人間の世を泣きし
茂陵の劉郎かれまた一時、
ひとたび立ちて手をあげて
十萬の漢騎漢の北、
王庭これより跡絶えて
胡天の月に遠ざかる
蠻族走りて歐の西、

大化の時運たゆみなく
萬波互に相答へ
風雲しだいに相呼びて
春秋こゝに四百年、

今カスピアの波狂ひ
今黒海の汐亂れ
群蝗天を暗うして
ファラオの邦に入る如く、
諸蠻つゞきてむらがりて
ドナウの險も支へ得ず、
曙光新たに春なりし
七丘の基なりてより
凱旋三百集め來し
天下の富の禍か、
羅馬、なんぢの天領は
煙塵火焔のひまとめて

かけ散る千軍萬馬のひゞき、

基督世紀第二十

悠久の天地またこゝに

東西の潮相まじり

あしたバルカンの雲あれて

ゆふべ朔漠の風狂ふ、

北夷のあらびまた增すと

故山きのふのおとづれに

また傷心の遊子の身、

盛衰存亡一場の

夢、帝國のあとかたか

愁に萌ゆる青草の

大野にひとりたち盡す

影今さらば消えしめよ、

霧と烟と思とに

あゝ今暮れ行くカムバニヤ。

（明治三十六年五月）

司馬子長名山藏書歌

凡百三十篇、五十二萬六千五百字、略以拾遺補藝、成一家之言、厥協六經異傳、整齊百家雜語、藏之名山、副在京師、俟後世聖人君子

史記自序

青冥高く貫きて

翠を染むる崖千仞、

鬼斧何の世につんざきて
こゝに中天の鎮おく、
雲か凝りなす星斗のしづく
香は九霄にうづまきて
降りて搖曳の嶺の春
虹霓の明滅時ありて
見るか天地の大文章、
さらば靈山宿るを許せ
一生の心血灑ぎなす
百三十の篇の數、
天馬の空を飛ぶに似て
風霜の氣を挾む

鳥跡すべて五十萬、
待つは千載の世の定評、
清鑑終にあやまたず
月天心にかゞやきて
江流花の影緩く
洋々の樂湧きあふれ
斯文の春のにほふとき、
其後の世を遠くまつ
思をなんぢ憐まば、
鳳簫あしたに呼ぶところ
玉英ゆふべに咲くところ
宿せ靈山わが此文。

風吹き雲とび鳥かける
千山はるかに見おろせば
浮沈は永く世に絶えず
悲歡こもごもあと換へて
群生悉く問えさる
人寰なにとてかくはひくき、
紛々たる哉浮世の爭
功名富貴の樂みいかに
金冕珠冠の誇りはなぞや、
一瞬忽ち消え行く雲か
鳥道跡なきむなしき空か、

天地いかなれば獨り永く
この悠々の春に嘯く。

あゝ今落日思をこめて
遠く彩雲の中に入る、
むかし龍門に生を受け
河山の陽に耕して
牧笛ときに春に呼び
半ば黄牛の背に寢ねて
落花の風に拂はれし
無心のあとを忍ぶべく。

十歳はじめて古文を習ひ
三墳五典深きを探り
八索九丘遠きをたづね
夜々(よな)親しむ孤燈のかげに
隈なく照し、古人の心、
筆は造化を補ひて
名は千秋にかんばしき
あと美みしそれはたむかし。
『獲麟このかた四百年
紛々の世の亂れより
久しく絶えし史書の文
大漢起りて世はまたひとつ、

脩めて後に傳ふべき
論著の望はたし得ず
九泉はるかに沈み去らば
繼ぐを忘れそわが此任』
先人いまはの血に泣く思
泰山おもき遺託のことば
夢寐しばらくも忘られず。
しばらく龍門の郷をさりて
南(みなみ)江淮に客衣の露、
青黛ならんで笑みを含む
九巍の嶺を眺めさりて
更に皇英のあとへば

騒人の怨また添へて
清し沅湘の秋の波。

青嵐ふたゝび袖を拂うて
北に汶泗の水渡り、
絃歌のひゞき猶傳ふ
魯に先聖のあと仰ぎ、
齊梁の野にさすらへて
燕趙の士と手を握り、
達觀まことに難しとも
あまねく窮めし道また道、
旅また思ふ遺詫のことは

『繼ぐを忘れぞ、わが此任』
それかあらしの夜の聲か
吹いて西窓のあかつきに
風樹の恨み星淡く。

太史ひとたびあとをつぎ
不肖の材をいましめて
夜を日につぎし至誠のつとめ
室家の業も忘られて
交遊はたまた棄て、しを
命そも何等の天の意ぞ、
壯士の冤を悲みて

天下のために訴へし
救の聲は罪なりと、
讒誣は劔の刃の如く
明月雲に蔽ほはれて
われ蠶室のはづかしめ。

囹圄の暗に思ひやれば
涼秋九月草枯るゝ、
かれ朔漠の夜半の夢、
胡笛咽んで霜によび
風沙碎けし骨散りて
穹廬の天をあふところ、

たゞ影をとゞめ名を嘆ぐ
將軍はまた何の思ひ、
比すれば泰山なほ輕く
時に鴻毛なほ重き
一死のあとをあげつろひ
說かんは難しや俗士の前。

沉淪すぎさる五十年
天下の笑と身をなして
醜辱悉く我に足る、
父母を顧みず妻子を思ひ
生を貪り死を憎む

情また天の貸すところ
たゞ理に激し身を忘る
丈夫の思たれかはしらむ、
轉ずべからず石ならず
一念先人の靈に觸れ
石室金匱くまなくすべて
讀み破りたる書萬卷、
曉鷄いねざる耳にきき
殘燈あしたの光に消へ
始をわきまへ終をたづね
缺けしを補ひ遺ちしを拾ひ
百家の言を整へて

跡統べ了る二千載、
先人の魂ほゝゑみて
照し臨まむいま子の功
厄にくるしみ世になやみ
思を傳へ後に垂る
列世の賢者うなつきて
神交われに許すやいかに、
周公亡び五百年
魯聖の光世にてりぬ
宣尼亡び四百年
天下今見る何の書ぞ

六經遠くあとをつぐ
百三十の篇の數、
永く一家の言を成す
鳥跡すべて五十萬、
巴人の歌にならはねば
待つは千載の世のさだめ、
朱殿瑤臺春はみじか
天地の間眺むれば
ひとり峻崖絶嶺のうち
藏むべからむこれこの文。
見よ今落日雲に入りて

遠く人界を逃れさる、
われ跡おはむ遠からじ、
一生の心血そゝぎなして
名山ひとりわが知を求め
永く清涼の風に駕して
塵外の氣に嘯かむ、いざ。

懷郷

夢に暮山のくれなゐの
雲のへ共にやすらひつ、
君が手とりて霞こむる
下界の春を見おろせば、

折しも東そらにほふ
月は一團の戀の靈、
あらしを拂ひ霧を吹き
わだつみ遠く澄みわたる
潮の歌に調べ添へ、
人の世永く春なれと
歌ふと見つるまぼろしや。

月は下界の春戀ひて
おぼろの夜半に袖かざし、
海は磯邊のさゆり花
かほりにつねにあこがれて

あさなの愛の歌、
知るや銀河の夜をこめて
白むは恨み遠きあなた
見えぬ大虛のすみに倚る
綠の星を思へばぞ。

その趣きのいみじさは
つめたき路の石も知る、
荒鷲高く天かけり
たけき翼に雲をさく
その戰ひのをゝしさも
嘆かむわれに戀なしと、

問はむみどりの苔つゝむ
古墳の夜半の聲いかに、
こゝにそゝぎし戀人の
涙は天に乾かじを。

春やセイヌのさゞなみに
たそ影てらす都人、
半ばは傘に影つゝむ
雲錦裳の粧ひや、
岸はみどりのわかめ吹く
世にはるかせの愛絶えじ、
水は流れて西の海

西の海はた波かよふ
潮導きひんがしの
扶桑の空に赴かば
思傳へよ人の子に。

故郷今花のしら雲か
姿ぞうかぶ青葉山
麓のみどり廣瀬河
花のおもかげやどしては
波はた何の歌ありや、
人の子思くるゝとき
夕の岸にひとりたち

此春いどゞ朧よと
嘆かば月も泣くべきを。

こゝにも咽ぶ旅の子の
夜半の思は君ぞしる、
ゐろりのまとゐ友さりて
灰やゝ深くつもる時
獨り向ふはたが姿、
寫繪聲はあらずとも
うちもる我目みらるゝ目
等しく涙湛へぬと
見るは迷かまた問はじ。

夜半に更け行くソルボヌの
鐘數へしもいくたびか
時に惱みてくれなゐの
血汐を吐きし夢ありと
知るや知らずや世捨人、
たゞ夕ぐれの風のねに
思は通ふ雲の路、
君はた我を思へりの
その慰にほゝゑまむ。

拙きしらべ厭はずば

受けよ齋けよ『*戀の宮』
潮路は遠し一萬里
波はた燃ゆるくれなゐの
海よりすゝむ文の旅、
菩提の林なごりの葉
緑を染むるわだつみの
あなた東のふるさとや、
光の翼誘ひ行け
暗の路また開かれよ、
舞ふ白鷗の羽のうへ
にほふ春雲の裳のうへ
ゆけやわか歌遠く遠く。

*ペトラルカの句

『ノートルダム』

あゝ悽愴の目を擧げて
見ずや無月の暗にたつ
『ノートルダム』の塔二つ、
『沈默』こゝに聲ありて
幽冥の世より遠く吹く
あらし夜半に何の歌。
霜に星象の色冴えて
高し天狼のまたゝく火、

みどりは萬古何の世に
震ひ初めし光ぞや、
巨塔しつかにうなづきて
語るかわかき九百年。

あゝおほいなる暗と空、
神秘のうちにたゝずめる
人はた何の靈ぞ、曰へ
有限無限の別ち絶え
有象無象の聲まじる
『ノートルダム』の夜半の塔。

『ミロのエーナス』

所謂『ミロのエーナス』は一千八百二十年希臘多島海の端ミロの島にてある農夫に發見せられしものなり學者の考證に據るにこは紀元前四世紀頃プラキシテレス及びスコパスの派と同時代の作なりとぞ唯に美婦人のみならず、猶また女神としてアフロデテイを表ばしし希臘の彫刻中殘りて今日に現存するは獨り是あるのみ端嚴にして力あり然かも猶いふべからざる青春美妙の趣を含みて其面貌のけだけさは全く人界の慾を離れて悠悠自ら足ることを示す。今『ルーブル館』に收めて其最貴なる珍寶の一とす

（リユーブケ及び其他）

石や何等の靈の化ぞ、

MUSÉE DU LOUVRE
La Vénus de Milo (marbre grec)

紅なる　重く　春深く
花魂ゆふべに暮れ迷ふ
玉楼の歌凝りなさば
取らむ有象のあと是れか、
端嚴微妙のおもかげに
浮世も塵も影とめず、
たとへば深く測りなく
藍を湛ふる波のへに
銀輪かげを照すごと、
嗚呼石何の靈ありて、
刻むを見るかアフロデテイ。

あゝあゝ高し理想の美、
これやアゼンの肩廣き
聖者に見えし幻か、
イヽダの嶺に爭ひて
勝ちし報に牧の子に
邪淫許せしそれならず、
曙の光に照らさるゝ
薔薇色染む頰の色
花よりにほふ獵の兒に
あこれが戀ひしそれならず、
力ある息貝を吹き
羽ある姿魚にのる

わだつみの子の群の中、
春南歐のあさぼらけ
潮の華のうたかたに
生りしと傳ふそれならず、
これや五濁の世に遠く
澄める匂へる若やげる
尊き高き理想の美——
仰けば心遠く遠く
神秘の息に吹かれ行きて
雲集る嶺に神遊ぶ
とこよの春の尙あなた、
天上の霞くれなゐの

色に聲ある愛の曲、
夢は銀漢の波に湧きて
鳳吹長く呼ぶところ、
下界ゆふべの露に泣く
幽蘭の香の昇り來て
星ことぐく笑む處。

青鸞花を啄みて
無何有の鄉にとびかける
跡を慕ふに羽たゆき
暮雲靜に聲なくて
夕の嶺に降るごと

心　再び　歸り　來て
みまもるいみじの石の像、
たくみ何等のたくみより
たゞ渾然の　鑿の跡
刻むか天の産みなせる
高き理想のおもざしを、
嫦娥の胸のゆらぎより
八重の高潮湧き立ちて
あなたに引かれ寄る如く
吸ふか眸を石の呼吸、
石に無聲の歌ありて
語るは遠き世々のあと、

世もあけぼの、紫の
雲はなれゆくオリンピヤ
十二の神のよさしより
花は不斷の春がすみ、
露か眞珠かたてがみに
散す銀馬の嘶に
聲に歌あるあさぼらけ、
綠をわけて紅を
誘ふ流れの行末の
大わだつみの狂も
三叉の戟の神鎭

神と人との群れ遊ぶ
春鉾魂の恨無く
肉と靈とは仇ならず、
泉はじめて巖より
溢れ湧き來る清らかの
血の脈いかに高かりし。
桂の絲橄欖の
森より仰ぐいや高き
アクロポリスの頂に
照りしは花か美か神か。

あゝ大なるアッチカの
倒れし跡の死の靜、
名匠夢のまぼろしを
觀じ刻める圓柱、
眞白き石は碎かれて
蔦に纏はれ野に埋れ、
野に春笑みて降れども
その妹見えずイリスの
聖なる谷は鳥去りぬ。
すぐれし國の姿よと
歌人傷む行く春の

曙冷えて幾千年、
遠く紅砂の原をわけ
椰子の緑の蔭くゞり、
流れて千里大水の
ナイルの流海に入る
港再び春を見し
それはた夢の一時か、
橄欖山の夜の暗に
伏せし至聖の説ける道
其末流の濁より、
女神よ君の姿見る
無垢清淨の花の片

大路の塵と碎かれて
暗と醜とに世は泣きぬ。

時か白鷗春に舞ふ
影は藍光の波照らす
南海のうへ　ミロの島、
そのわだつみの曙の
空に虹霓の文染めて
ひゞきにけらし天の樂、
千歳埋れし美の靈の
光ふたゝび世に照りて
アフロデテイの影を見し

その日ことしへ惠あれ。

南海はるか波わけて
こゝに葡萄の紫の
房かんばしき空の下、
路に薔薇は蒔かねども
民の渇仰世の歡喜
産みてセイヌの岸のうへ
あと留めしは遠からじ。
戀に恨に世を泣きて
世をあざけりて名も清き
ラインの流渡り來し

愁の詩人、いやはての
呼吸(こ)は神よ御膚(はだ)より
にほふ微妙のそよかぜに
交へんとこそ願ひしか。

東海遙か思ひやれば
鳳凰いつか飛び去りて
蕙蘭ながく怨の香(か)、
世は粉黛の粧さへ
曉照らす鏡のへ
雲鬢ながく匂はじを
あゝあこがるゝ世の祈、

神韻永く香を吹きて
聖美の影をとこしへに、
今藝園の花にほふ
セイヌの河の片岸に
とめよあゝ神アフロデテイ。

*プラトウ　**パリス　***アドニス
◎ハイネ

哀歌

東海はるか一萬里
故山の春にさきだちて
人は愁のおとづれを
傳ふセイヌの夕(ゆふ)の岸、

江流思をこめながら
花ほ未だし流れじを、
運命何の姝より
今はた彼れに無常のあらし、
幽冥不可知の高きより
遠きに靈を吹き去るや。

逝けりや黑欄名を圍む
片紙夢とし消えざるや、
逝けりや幽渺照し射る
靈火の宿り目の光
これより見るをよくせずや、

逝けりや一代野に高き
風霜秋に冴ゆる聲
是より聞くをよくせずや。

逝けりや春秋三十二
遠く暮山の雲より湧き
閃電ゆふべの暗を射て
山河忽ち鳴りよどむ
その雷の名をとめし
かれ薄命の天の才。

逝けりや赤門首先のほまれ

逝けりや鶴城率土の誇り
逝けりや昭代七歩の才、
織りなす文藻花より匂ひ
風雲胸にうづまきて
陶鎔さながら神なりし
あゝおほいなる天の才
君また逝かざるべからずや。

セイヌよ流轉の世のかげと
流るゝ水を觀じ去る
東西悟りの世々の聲
今彼の上に聞くべしと

われ夢みしや、魂遠く
波に泛びて夢みしや、
無常を常に聞き馴れて
驚く耳は稀ながら
昨日はむなし明日知れず
『望はあだ』の世の聲を
われや半は笑ひしか。

セイヌよ夕暮思をこめて
暗き恨みに流れ行け
岸に次第にくれかゝる
九百餘年の世々の夢、

『ノートルダム』の塔の上、
雲今夜のおとづれを
空のあなたに傳へ行かば
有象無象の聲まじる
あらしの宿を訪ふていへ、
『東海あなた一萬里
斯文の春の行末の
望つなぎしおほいなる
光は永く消え行く』と。

セイヌよゆふべの波深く
神女今猶ひそみなば、

涙　清　き　琴　の　絃
歌は愁の音につかれ
夕暮しばし静なる
眠に入らむ彼の前、
擧げよ其波また泣きて——
覺せ再び人の子の
悼盡きせぬ聲あげて——
歌は光は詩は樂は
靈と靈との途繋ぐ、
神女今はた聲あらば
泣かずや逝ける君が身を。

悼むに堪へぬ天の才、
雲霓かすかに名殘の光
暮天の嶺に殘る時、
落花色なき夕の水
岸にたゝずむ旅の子が
春にあこがれ神に醉ひ
はてなき天を慕ふごと、
今銷魂の友の聲
かすかに響く後の世に
彼よりよそのおほいなる
靈はた彼を歌ふべく——
さらばしばしのわが調べ、

錦繡織りなすたくみの難き
不敏は遂に許されむ、
靈は嘉せむたゞ誠、
友と呼ばんはかしこかる
師なり靈なり光なる
君を悼みの歌いかに

（序歌）

羅馬郊外にシェリーの墓を訪へる後モンテ、テタスチョの丘に登りて

東はるかにアペナインの峯、
彩雲ゆるくたなびきて
思を傳ふサビィンの山、
七丘しづかに春深く
人籟はたまた聖うして
霞にこもる何の歌、
閑かずや聲は落日の
名殘の影のたゞなかに、
聲は夕の風の靈
聲は靜にわれに呼ぶ
『人皆遂に逝くべし』と、

嵐の雲湧く空のをち、
荒波眠る海の底、
暗の湧き來る森の奥、
夢の生る、神秘の地、
運命の闘ひ了れる處、
愁の極みの喜びなるか、
惱みの了れる平和の郷か、
星辰歌湧き盡きせぬ邦か、
銀漢波止み花咲く邦か、
蒼穹形の替れる場か、
あ、人間の遂に知らざる
刧空はたまた神秘を解かぬ

不測の幽淵あ、汝、
なんぢ、此世に死と呼ぶ者よ。

迫る幻秋の露
悽惨のまみ思濃く、
白衣の長裾ひるがへし
青き花撒き星散らし
下界に下りくる彼や死か、
大なるもの美なるもの
いみじかしこきものすべて
皆悉くうち伏すか。

まぼろし去りて霞吹く
あゝ七丘の春しづか、
名殘の聲は落日の
光をかへす雲の中に、
聲はゆふべの風の靈
聲は靜にわれに呼ぶ
『人みな遂に逝くべし』と。

羅馬カムパニヤの『クオ、ワーデス』寺院

その心眼のまぼろしに

大使徒至聖の影見しや、
地上の權威の極を
示す羅馬の大城壁、
壁のあなたは血の叫び、
救世の聲は溺らされ
光は永く暗に消えて
たゞ見る暴虐非道の狂
夜半の空にあらし泣き
あしたの風に露咽び、
赤子は高く手を擧げて
來らん奇蹟を待つに泣く、
一度逃れし猛虎の窟

さらば歸りてわが血に染めむ、
最後の慘狀いま目にあり、
鐵釘四肢に喰ひ入らむ
磔刑の惱み使徒のほまれ、
感謝の涙ひれふして
受けざらめやは天の命、
芥子の譬外ならず
大地わが血に肥ゆる時
花紅の色ふべく。

カムバニヤ

さらば綠のカムバニヤ
迷へる羊導きの
わが足なんぢにまた印さじ。

いざ行かむ、罪業の都、
霹靂電光七丘うちて
皇天怒りに震ふ處
いざゆかむ、羅馬、
ゆかむ、第二のバビロニヤ、
殉道の血今なんぢを染めむ。

＊　＊　＊

今も綠のカムバニヤ
今も紅野花の匂ひ、
色に聯想のあと遠き
ヨルダンの岸橄欖の丘、
靈なる光世に照りて

ふりし天火の『パプテズマ』
偉大は常に偉大を生みて
君またこゝに殉道の
血を灑ぎたりあゝ、大使徒、
それより一千九百年
血は花と咲き花は果となり
果はまた腐る自然の理法、
あゝ、大使徒、君逝きて
こゝに一千九百年。

深夜

睡るが如き月の光

夢むに似たる森の姿
たゞ水鳥の蘆間の戀を
さゝやくそれか漣の
ほのかかすかの音ありて
あゝ、人遠し夜深し。

永劫の戀

花よりよそのよそ粧ひと
染めしはじめの空の虹
その遠き世にその空に
戀ひし二人にあらざるや。

三千歳一たびなると聞く
そのくれなゐの桃の實を
わかちて嶺の春の夕
戀ひし二人にあらざるや。

南の極の星高き
十字の光仰ぎ見て
椰子のみどりの森かげに
戀ひし二人にあらざるや。

あゝ時うつる世々のあと
時の潮のたゞ中に

浮きもしづみも共にして
こひし二人にあらざるや。

『愁』

雪より眞白き透きとる衣に
雪より眞白き膚を包み
疲れし『望』とあだなる『戀』と
幼子ふたりをやさしの胸に
かすかの吐息に夕霧わかし
思の亂に夕烟靡け

夕の雲の上へしづかにかくるあゝあゝやさしの『愁』の影や。

凱歌

渤海夜半の怒濤を蹴りて
暴露の水砦微塵に碎き
十年怨の凝りなす處
遼東ふたゝび我手に歸り
霹靂電光あらしに亂れ
陰雲碎けてうづまくきわみ
黄海ふたゝびみどりを凝らし

旭日新たにあけゆく海に
大艦艦艦艦むらがりすゝみ
前艦橋より凱歌の喇叭
こくうをゆすりて響くが如く——

かく嗚呼青年、なんぢの胸に
凱歌のひゞきは絶えざらむ
夜半の燈下に思をこらし
難きを破りて惑をほどき
行くべき無窮の進みの一歩
おどりて前途にたゝん時。

ドナウ江上の吟

みどりに　き『カスタニイ』
みどりは四列遠くかみ、
夕暮群る、逍遙の
影と姿と織りなせる
プラタの街塵香ばしく、
双輪時に龍馬をかりて
玉顔いづれの珠楼にむかふ、
風は笑語を吹きおくり
空は歌樂のよどみ湧き
涙の泉あと絶ゆる

こゝ、世は『憂の谷』ならず。
人生の海清愁の
たのしき境またかなた、
大都南の郭の外
地は一面の幽界の
緑樹しづかに影ふかく
曳きくる棺車おふ處、
中に劃して紅の
花か凝りなす無韻の哀歌、
あゝこれ恒星互に歌ひ
山川こもぐ聲添へて

しらぶる不斷の莊嚴の
曲の一韻探り來て
わが人界に移し來し
偉大の靈のねむる處。

憂に沈む神女の下
見るはなんぢかモツアルト、
桂冠の天使手をあげて
なんぢにふれんとすシユーバルト、
幽玄のさかひ思をやりて
かしらなゝめのブラームス、
天童天女群がりて

下より歌ふシトラウス、
綠の影に半身の
像はた君かあゝグルック、
像なし銘なし雪の如
眞白き石のたゞおもて
鐫りなす瑤琴の下の名の
おほいなるかなベートーベン。
あゝおほいなる靈界の子等
等しくこゝにあとをとゞめて
月すみ風やむ夜半の空は
何等の微妙の樂のしらべぞ。
天の萬軍をかきわけて

ひとり無象の空にとぶ
『セラフ』伴なく淋しくて
人世の痛み暗なやみ
身にとこしへに纏へども
天の妙音耳にあり。
思は遠し高山の曲、
神は通ふ天上の韻、
大絃小絃大鼓小鼓
花咲き花散り
水わき水おち、
千軍忽ち大野にみちて
萬馬は嘶く霞の夕、

あゝ今勇士は楯にのりて
歸るよ故郷のほまれの門に、
あゝ今美人は嬌羞たへず
うつむく華燭の光の夕、
あゝ今冥府の神秘ひらけて
『サタン』は天使と手を相握り、
あゝ今天風我身をのせて
彩虹彩雲ひらめくところ
玉樓金殿虚空にそびゆ、
藝術永く榮ゆれど
紅塵の中いくたびか

見る盛衰のことわりぞ、
時は移り世はすさぶ
跡を今見るオーストリヤ、
あゝ美人老いて秋に泣き
蛺蝶むなしく春を思うて
なごりの花の露によるごと、
神聖羅馬帝國のあと
『チユートン』の盟主歐の中堅
中原の鹿他の手におちて
『ハプスブルク』の光榮うすき
なんぢを憐む、オーストリヤ。

カーレンベルグの頂に
我今ひとり夕陽の天、
萬家の大都遠く下に
ドナウの大河涵し行く
岸に連る幾丘陵、
其丘のあなた水のあなた
東亞の萬軍亂れ入りて
野は青草のあとを絶ち、
『モンゴル』、『タータル』、『オットマン』
火山碎けて鐵石の
溶液嶺より降る如く、
霹靂電火震ひ落ちて

冥府の暗を照す如く、
こゝに狂ひし東亞の軍、
再びひがし『聖墳の地』
鮮血注ぎて救ふべく
百萬の十字軍幾度過ぎし。
それよりこのかた五百年
『タータル』敗れて東に逃れ
弦月の旗この嶺に
たちし名殘はたゞ青草。

波紅に淀みしや
其水沿うて幾百里、

わが途再び大江の岸、
緑野ひらいて牛羊眠り
丘陵點じて白雲うかぶ。
こゝに『アルーヤ』以外の精華
據る美はしき山河の固
岸につらなる樓閣巨殿
尖頂高く空をつきて
夕日をかへす衆議の院府、
城壁むかしの跡とめて
高しかなたに列王の宮、
盛なるかな

ウンガール

有史このかた東より
はるかにこゝに移りきて
こゝに嚴冬の霜にたへ、
あらしの音に紛られて
暗濤ほのかに鳴るごとく、
夜半の鐘のたゞなかに
朽ちし古墳をのがれ來て
怨の幽鬼泣く如き
國の調べに跡のこす
なやみの歴史數百年、
今時いたり春回り
花咲き鳥鳴く希望の姿

紅白綠の大旗は
飛ばん再び自由の風に。

あゝ、ウンガール、
先きに獨立の旗さかれ
干戈悉く壞られし
恨をのみて五十年、
時に暴主に威を添へて
義軍を討ちし北の邦、
今も呑噛の慾あかず、
封豕長蛇東にむかひ
愛親覺羅の祖先の墓を

發(あは)きて遂に南に下る。
東海扶桑の民の怒
發して火となり鐵となり
其馬首一度むくところ
鴨綠の水南山の嶮
皆ひれふして聲あらず。

あゝウンガール、
『アルーア』以外の人種の精華
ひとりなんぢとわれとあり、
時は轉じ世は移り
未來は笑ふて我待てり、

見よ大江の水、
示すは活動無窮の姿、
流れて流れてやまず、
　れてこれより南に遠く
バルカンの荒雲日暮るゝほとり
アドリヤノーペル弦月の天
コンスタンチノーペル薄暮の空
暗を姿をひたし流して
はるかに黑海の水に入るべく。
（明治三十七年夏）

サレブ峯頭の吟

緣は暗し千仞の崖

下なる大野は遠く烟ふり
右は白帆漣漪を引きて
白鷗また飛ぶ藍光の水、
名邑並びて美を競ふ
長汀廻りて六十里、
そこにルーソー生をうけ
そこにヲルテイア枯腸をしぼり
そこにギボン大史を編み
そこにバイロン囚者を詠みし
ゼネワの鏡湖レーマンの水。
げにや千載功業のあと

鴻の大空に去る如く
文名はたまた不朽に鐫らず、
たゞ山川のおほいなる
巧のあとの新たなる
高きにのぼり遠きを望み
逝けるを傷み生けるを忍ぶ
飄遊今われ二春秋、
閑雲一片心なく
長空かくる跡とや見えむ。
さりや、暮行く夕の雲
人界の子の悟らざる

惱は中に宿らずや、
天地の情をその胸に
山河の影をその袖に
包みて過ぎ去る何のほとり。

行方(ゆく)か一黛あなたの青螺
夢むる如き暮山のあなた
かれ佛蘭西の夕空か。
五天の東八千里

ヒマラヤ暮雪の嶺の下
聖者の遺文求め來て
客衣ふたゝびセイヌの春の

水に灑ぎし好學士
魂は異郷に迷はずや。
聞くまた再び故郷のたより、
清きを名に負ふ緇衣の賢
澤畔の行吟それならなくに
仰ぎし眞如の月黑く
隱るると聞きぬ西の空、
更に骨肉恩愛の彼れ
不敏の兄に仕へ來て
盡し、思報はれず
故山の花を摘み送る
にほひ、紅、色深き

誠は遂に人の世に
また見るべくもあらずとや。
誰が涙痕に濕へる
文や蒼烟夕の空に
何等の星の涙添へて
こゝに飄浪の客衣の袖
搾れとせむる無限の恨。

紅雲夕べに暮るゝ影に
樂しかりしの聲もあらせず
同胞先に生れ來て
愛の光を身にうけし

報は今はいたづらに
たゞ君の名を呼ばんのみ、
湖山の眺め勝地の遊
思しばらくはらすべく
のぼれば空翠袖を拂ふて
幽怨しづかに潮の如く
遠く東海の空より到る。

アルペンの嶺の草花
紅紫千々に匂ふ。
高嶺の夏のなか〳〵に
故山の秋に似たるかな。

嗚呼其秋の夕ぐれや
むかしは共に花つみて
淋しき孤館の雨の夜
われ口ずさみ君書きぬ。
浮世の秋を知らざれば
籠狭けれど鳥啼きき。
鳥鳴き花咲き月にほふ
春秋いくたび廻り來て
われや客衣の袖寒く
君や九泉魂いづこ。
逝けりと聞くは夢ならず、

生けりと猶見る夜々の夢
悽愴のあした風吹きて
うつゝにかへす無情の叫び、
擴げし腕は空を抱きて
魂は呼べども雲白う。
萬里の遠きアルペンの上
花つみとりし昔をしのび
再びあとを紅に
白に紫つみとれ
幽明一たひ離れては
いづくの風に傳ふべき。
あゝ風吹いて雲ひがし

光を孕み虹を吐き
東海はるかに驅け行かば
わがため故山の墓の上
花に夕の露そゝげ。

招ける魂は遠く去りて
野花青草の嶺のうへ
佇みのこる影ひとつ、

見る今サボイの山のうへ
日はしづかにくだり行き
烟はかろく森こめて
下にはるかにローンの流れ、

東千山萬嶽のうへ
雲は漸く眠るべく
搖曳の影暗きほとり
一峯拔きて天に入る
白雪嶺の名も高く
上にはやはや照る一輪の月。

萬籟しづかにおさまりて
獨り飛蟲の羽うつ音、
牛羊牧より歸る鈴のね、
遠きに聞ゆる異禽の叫、
あゝ今天地は至上の愛か、

微妙を極むる平和の姿
詛ふにあまりにやさしの姿——
あゝわが弟、遂に逝けりや。

*藤井宣正氏
**清澤滿之氏

ライプチヒ郊外ナポレオンの紀念碑

烟塵天を暗うして
萬軍ひとしく大地を蹴たて
砲彈散彈こくうに吠えて
草木悉く兵なりし

むかしの姿今いづこ。
人は空しく過ぎされど
自然の大化過たず
春は大荒に歸り來て
見渡す廣き一望の
野は今漸く夕のこゝろ
遙かに一列『ポプラ』の綠
風に靡きていづれに向ふ。

柵に攀ぢ樹に登り
戯れし無心の子らの群

去りてわが影たゞ殘る
田に野に畑に幾度か
鋤き返されて留るは
丸か劍か血を染めて
こゝ、肥すべくさらされし
貔貅の數は二十萬。

見よ今震ふ樹の下かげ
鐵柵愁に冷かに
下の青草の聲なきに
共に懷古の歌を呼ぶ。

曠世の偉人こゝに立ち
運命の潮返すべく
胸に湛へし風雲の機、
あはれ堅陣遂に潰えて
なだれを打ちて崩れ來し
中にたぢろぐ鷲の大旗
翼は折れぬ、旗裂けぬ。

あ、明日南三百里
秋のエルバの籠の鳥
あ、明日ふたゝび百日の
光榮最後の金の冠

あゝ明日是より西百里
ヲーターローの暮の雲
あゝ明日烟波の沖萬里
セントヘレナの墓一つ。

成敗もの、數ならず
横目縦鼻世に湧きて
人と呼び來し數千劫
生ける屍走る肉
みな蠢々の塊なるを
ひとり君出でおほいなる
力あるものこゝに見ぬ。

咎むる勿れ天の命、
詩人の感を深うして
百世君を歌ふべく
最期は悲惨の島の上
島を洗ふて流れ去る
波に沈める夕陽の
光は水に亡びんや。

バイロン

『シムーン』の烈風吹き絶えし
砂漠を照す眞晝の光、
頭上に燃え立つ怒の焔、

渾身さながら瀑なす汗に
重き荷苦む可憐の旅客、
足なへ手なへて倒るとき
はからず認むる遠のみどり、
あへぎたどれば波とそよぐ
椰子のしげみの十丈高き、
下に湧きづる玉なす泉
滾々みなぎる生命の水、
せわしく兩手に掬む如く——
青春きのふのあけぼのは
堪へがたかりし知識の渴。

學び悟れる今何ぞや。

弦月斜に露寒き

墓門の夜半に泣く如く
青燐焰のさめし時、
古墳の上に佇みて
幽冥の客に問ひし幾度たび、
切灰重る宇宙の死滅、
殘骸骨は丘と積みて
青山とこしへに春ならず、
いづれか秋に逢はざらむ
花のなごりを尋ぬれば、

濃霧の海にわけ入りて
あらしにかこつ枯落葉。
學び悟れる今なぞや。

陰雲雨を含みさりて
頭上を翔くる魔の姿、
追へば人なき夕の岸、
神秘下界に探るべく
彗星の魂降りきて
九仞の淵わけし跡
今も怒濤の山さけて

あざむか脆き人の世を。
太虛を廻る千萬の球
(丙に無數の靈宿る)
勇みて光の途行くいづれ
喘ぎて亡びに歸るはいづれ、
いづれか驚き逃げはしる
いづれか喜び躍り行く、
宇宙の合調ききしはたそや、
それはた更におほいなる
非——合調の一ふしか。

彩虹一たび橋絶えて
天上ながく音づれをやめ、
夕ぐれ朱の雲の粧、
たゝ人界のあこがれの
悩を無窮に誘ふよすが、
悟の異名薄命の
わが手空しく虚を握み
わが脚土を離れ得ず、
知識の渇をとゞむべき
甘露夜光の盃を
觸れしは夢か、めさむれば
またとこしへに乾く唇。

死と疑の子となりて
惑の悩むしばめる
心さながら巣か蜂の、
救をこゝと誤りし
戀はたにがき底の澱、
見よ明眸の閃に
燃ゆるは情焔何の恨、
冥府の底の暗深く
光を内に吸とりて
うづく魔軍の影たゞ示す
硫黄の池の波の色、

金髪亂れてかざしの薔薇
落ちて碎けてちりあくた、
碎くるいまはの花の吐息
樂土の榮のとこしへを
ねたむ思に亡びぬと。

迷の暗はや足りぬ、
山河姿を整へて
天地清淨の身に返り
自然の讃美ひゞく時、
煩悶理性の爭に
人運命のもてあそび、

新の救いつこぞや。

千尋まくらき波の下
蒼海さながら陰府の姿、
潜ればあらしに燕の如く
かすけき光てらし射る
尾鰭を振ふ百千の魚群、
時に鯨鯢潮を亂し、
海草今また刺ある四肢に
纏はん苦、凌ぎ行き
底なる眞珠を求むるごとく、
かくまた人生懷疑の海に

霊魂くゞりて光を探る、
拾はむ其玉名は『行爲』と。

紅焔黑煙空を突くと
見しもわれから、燃えたちし
名殘火はなほ亡びじを、
殘れる焔さは持ち行かむ、
綠を染む春草の
望かへりて死せる灰
再び熱き自由の郷に。

颶風の翼しばるはたそや、

瀑布の流とむるはたそや、
磁石の北向く拒むはたそや、
自由の大靈血ある胸に、
焔を燃すを消さんはたそや。

ユーラの連山なだれおとして
アルペン、首峰の答ふる如く、
曉銀河の水掬みて
粧ふ女神、(名は月か)、
胸はやさしく脈うちて
大地の靈をしたふ時、
大わだつみの波ゆらぎ

あらしを笑ふ鋼鐵の
十萬の艦牽ゐ來て
沖より潮の寄する如く
聞きしやわがよぶ自由の歌に
全歐ことごとくよどみしを。

盛衰の運　神たゞ避けむ。

葡萄の房の紫の
空やセイヌの春の水、
花を流して行く水の
はては大海、あけの汐

漲ざる音か凱歌は
自由の讃美、黃金の
世を今と見しまぼろしや。

詩人夜半の露にさめ
古壘の月に嘯きて、
玉樓の昔夜の宴
笑を含みて君王の
おもて光りしいにしへを、
榮華の夢を呼ぶ如く、
巴里の花のうつろひを
あゝ、其自由の喪失を

我歌はんに何の琴。

春また遠しオリンピヤ、
智慧は　緑眸
戀は　紅頬。
たくみの、榮の、よろこびの
春いや遠し　二千年、
アクロポリスに月清く
レスボスさうびにほへども、
秋ならざるに愁の狹霧、
神殿空しく破壁をとめて
サーモピリイの山ひとり泣く。

裂かれてしかも飄へり
あらしに叫ぶ自由の旗、
山河の姿移らざる
故郷に再び飛ぶは何時、
成らんか、サラミス波名をよばむ
否か、さはモレア野を血に染めん、
光榮二の途に俱、
さらば鼓動の胸の血を
湧かしてたてたてあゝわが友、
風清うして空高き
秋におごれる若鷹の

翼とゞめん境なく
翔けん雲海限りあらじを、
行雲もろともあらしに呼んで
いざや天涯遠くたゝむ、
『ルックス、エクス、オーリェンテ』
あゝ見よ東方光あなたに。

歐羅巴大陸回顧の歌

四たび今見る地中海、
春秋三たび過ぎ去りし
むかしは曙の波の色
紅雲紫雲に飛びちがふ

白鷗の胸に先づ照りし
旭日の下に躍りしよ。
秋なほ遠き暮の空
丘また丘を見おろして
焔の海を身に包む
エトナを高く雲のうへ
海路遙かに仰ぎ見し
それも昔か波めぐる、
あゝ波めぐる、水流る、
時亦過ぎていやはての
別をなんぢの空に水に
われ今告げむ歐羅巴。

アルビヨンの岸去りてより
ビスケイの波あらからず、
千里遙かに波送る
ジブラルタアの水過ぎて
昨日は樂園の名に高き
藍光いみじきネープルス、
十月の秋暖に
白雲空に高うして
明光笑ふポゾリの岸
白堊點ずるバイアエの村、
歴史を遠くたどり行けば

北七丘の都より
千乘萬騎率ゐ來て
狂ひ戯れし帝王の
名は戰慄の血の叫び、
玉樓こゝに湧き立ち
脂粉溶かし、湯沐の
香はあたゝかき春がすみ、
羅馬むかしの光榮の
夢は再び歸らねど
詩情は酌みて盡きせざる
南歐の岸、藍の水、
海燕時に影を照して

孤舟に歌ふ少女の聲に
風もしづまる一灣の夕、
次第に波の暮れかゝる
沖にはるかにイスキアの島、
詩人の戀のおもかげを
殘す姿のいともいみじく、
天地萬象こゝに靜に
夢は星光にたどりよぢて
高く雲漢の上にのぼりし
それはた過ぎしたゞの一日か、
月か年か千歳も
永遠の前にたゞ一瞬、

存在ながく神秘に掩はれ
運命つねに不測に終る
(悠久の靈の一呼吸)
微なる人間猶生ありて
われ今遠く東に歸る。

見よ日は亭午に近けり
風やゝはげしく波をどる、
雲かすかなる沖の火山
ストロンボリの麓にして
蝼蟻の春にいそしむ如く
洪爐の淵に片時の生を

營む一團の人の郷、
右に眺めて過ぎさりて
海峽メシナの水に今
照す東海の孤客の影、
影は流れて水と共に
なんぢに別る歐羅巴。

むかし化生の白牛の
脊に戀つみて花のせて
あけぼの清き朝汐の
海を渡りし美人の名、
その名を借れる大陸の

なんぢに別る歐羅巴、
雲心無うして風に任せ
蘋藻情有りて流に靡く
あとさながらの旅の跡、
アルペンの雪、ラインの水
セイヌのあしたドナフの夕、
めぐりし跡は追想の
思の泉湧くがまゝ、
夜半にたどる人の子が
次第に後に遠ざかる
街燈の光忍ぶ如、
さはいへ故山を思ひては

飛鳥の翼たゆくして
暮山の宿に歸る如、
流水みどりを湛え來て
大なる壑に入る如く
後を顧み前を見て
われ今別る、歐羅巴。

こゝに春秋みたびの宿り、
越鳥南枝に巣くふの譬、
夢魂しば〳〵東に馳せて
思は悲む夜鶴の吟
風に待ちわぶ秋鴻のたより、

喜つねに稀にして
憂は多き人の世に、
一たび空は曇り來て
セイヌの岸に友の訃音、
二たびあらし狂ひきて
アルペンの下、清湖のうへ
至愛の骨肉逝けるおとづれ、
三春の夕風無くて
しづかに花の眠る如く、
九秋の暮、洞庭の
水波たちて楊柳の
枯葉次第に散る如く、

その他、共に幽冥の
郷に逝けるや幾何ぞ。
天地莊嚴の美は永く
わが人界の愁に對し、
長空染めなす彩虹は
閻浮の友の涙に照るか。
やんぬる哉、時うつり
メシナは後に遠ざかり、
橘柚檸檬の森しげき
風かんばしきカラブリヤ、
藍をつねなる空ながら
今灰色の雲かゝる

南伊太利陸の端、
その一瞥をいやはてに
爾に別る、歐羅巴。
前を望めば渺々の水、
清濁悉く合せ呑み
凝滯つゆ無き偉人の如く、
雲をひたし風を孕み
光を吐き暗を呑み
天の圓蓋を胸にうつす
大海原の水また水、
はるかに萬里の潮を呼びて

わが東海の空に連る。

潮流互に相混じ
風雲共に流れ合ひ
文運時運西と東と
ひとつにまじる大化の妙、
昔東方の光受けて
イオニヤの海あけわたり
チベルの岸に花咲きし
このかたたどる一道の
光はこゝに二千年、
見よ今東海扶桑の邦

その文華を新たに亞細亞に
傳へて世界の姿を更へむ。

大陸亞細亞歐羅巴
空を仰げば一面の蒼穹、
波また續きて隔あらねど
差別平等互に相より
人爲天然こもぐたよりて
名に心あり力あり、
理想の夢を笑へども
現實の世に悲める
今日より後のおほいなる

高き望に備ふ途、
錦繡の裏文無くて
光明の蔭暗深き
基督世紀第二十
その文明の功と過と
君たゞ永遠の靈に問へ。

嗚呼歐羅巴、なんぢに別る、
今や故山の戰雲暗く
海荒れ波荒れ空荒れて
炎熱身を焚く遼東の野
寒風膚裂く朔北の空

集る王師五十萬、
蛟龍の吟劍鳴りて
雲霓の文氣冲で
身命輕く義重く
かざす旭日の旗の前
豺狼虎豹ことごとく
次第に北に驅られ去る、
膺懲の功全くて
暴露を東亞の天の外に
拂ひて禍根を絶ち去らむ
望いかでか空ならむ。
天を祐け命を受け

民を導き俗を化し、
爾の文華を、歐羅巴、
傳へて亞細亞に光布き
新たに天地を春にして
世界の姿換ふるべく
皇天こゝに懸くる命
享くるや嗚呼民何の榮(はえ)
あゝ時たえず移り行く、
夕風あらし
夕波あらし、
海上泛ぶ雲千片

渦巻き立つを貫きて、
巨人の射放つ矢の如く
偉大の靈より群がりて
湧きくる思想の火の如く、
燦爛散り射る夕の光
おほいなる日は今沈む。

日の入る處今三とせ、
日出づる東海の波萬里
はてより來りて今歸る
孤客なんぢに慇懃の
別れを惜む歐羅巴、

昇る日誠におほいなり
落つる日ひとしくおほいなり、
昇るも入るも移り行く
無常無窮の世の姿
觀じて民よ嗚呼思へ、
おのれの小を思ふ時
人ははじめて大となり
義により命を悟る時
國にはじめて光あり。

別れむさらば歐羅巴、
烟波の外に大陸の

端今遠く消果つる
海、空、影、音、たゞひとつ、
今咆え叫ぶ夜の風
今山と立つ暗き波
千萬の響き
千萬のしづまり
生死幽明逢ふ處
大荒蒼穹寄る處
浮漚の姿一微塵
われ今歸る遠く東に。

（明治三十七年十月）

土井晩翠著譯

東海遊子吟　續篇以下

韻文譯　**失樂園**

追憶四千年

附錄

光榮の追想（日本海々戰歌の一節）

麓三州の野にわたり
肩を紫雲の外に拔く
山か、提督まじろがず、
龍亞太泉魔を碎き
干將莫邪妖を割く
斷は久しく定まれど、
重きをになふ雙の肩、
霧たちこめて妖鯨の
暗に逃れん憂より、
胸や千仞わだつみの

底をかへして湧きあがり、
九天のみどり涵し拍つ
波は思と亂れずや、
有象の海にあらしあり、
更に優れる心海の
惱、――無象の荒るゝ波
惱は常に聖なるを、
天地をおほふいさをしを
讃ぜん前に嗚呼思へ、
千載つねにおほひなる
惱に因りておほいなる
人と靈とを見るべしと。

空も苦惱の暗晴るゝ、
此日五月の二十七、
遙かに沖の遠きより
妙華の春のおとづれを
威は秋霜の陣のうへ
飛ばすは無線の電の羽、
提督起ちて一令を
傳へて拔ける千鈞の
錨のしづく三十里、
空は晴るれど海あらき
怒濤を蹴りてまつしくら、

運命いづれ、生か死か、
撰いづれを厭はんや、
光榮ふたつの途に共。

嗚呼日本海、夏の波
山と立ち來る對馬沖、
上の無象の海に湧く
時劫の潮また捲きて、
東西こゝに二つの史
一つに注ぐ大波瀾、
歳やまさしく橿原
國の基の成りてより

春秋互に移りくる
二千五百六十五、
おほいなるもの高きもの
常に滿つれど目に觸れず、
常に神秘の名によりて
暗に閃めく電光の
たゞ一線を世に洩す
靈今こゝに三萬の
身となり、血となり、肉となり、
水師となりて、鋼鐵の
生けるが中にたつを見よ、
銀浪捲きて雪散りぬ、

汐は矢と射る東水道
見よ今煤烟虚空に引きて
敵艦まさしく沖のあなた、
『帝國の運命この役に
懸る』起て起てあゝ壯士、
起ちて扶桑の精凝れる
威武を四海の目に示せ。

硝烟爆烟うづまきて
白日忽ち暗となり、
風輪狂ひてその暗を
忽ち拂ふ對馬沖、

強弩三千汐を射し
昔何等の戲ぞ、
鉛のあらし火のあらし
潮のあらし咆えあらぶ
南壹岐島沖の島
北鬱陵竹の島、
天地は擧げて百團の
焰に狂ふ霹靂車。

飛衞の覘切りはなつ
降魔の巨彈亂れ落ちて、
尺餘の鐵板蜂の巣と

碎かれ沈む『オスラビヤ』、
今また暗に先んずる
水雷砲火に威を添へて
進むさながら矢の如く、
『ボロヂノ』『スワロフ』先王の
名を負ふ友と相次ぎて
溶くる千仞の波の泡、
星は暗なる海のうへ、
探海燈のすさまじき
光めあてに碎かるゝ、
『シソイキリキイ』『ナバリノウ』、
あくる日降る運命を

暗の大潮捲き返し
流す『ニコラス』『アリョール』
暗の大海暗の波
暗たゞ獨りあかしのみ。
鯨鯢下に駭きて
鬼神壯烈にために泣く
いさをの數を擧げ得んや、
雲蒸長く時ありし
二千餘年の國の粹、
一兵一士ことごとく
『勇の權化』と奮ひしを。

あゝ魯提督、一掬の
涙を君に捧ぐべく
扶桑の民に心あり、
波また波の一萬里
東半球を横に斷ち、
雨にあらしに狂ひ立つ、
潮の山に半歳の
辛酸つゆも報はれず、
精を盡くせし鋼鐵の
三十餘艦、一萬の
水師をのせて悉く

みな龍王の犧牲に、
敵の一艦しづめ得ず
武運拙く捕はれし
君勇なしと曰ふは誰そ、
たゞ赫耀の朝光
妖雲拂ひて日の昇る
大東洋の東郷の
おもてに立ちし薄命を
嘆げ——あゝ、名は日本海
曠古のほまれ傳ふべく
十億五州の民こぞり
胸のゆらぎを高うして

おとづれ待てる双の耳に
飛電のたよりかけり行け、
あゝ鵬の羽をのす處
あらしの海に戰爭の
ありしこのかた至高の名、
丈餘金剛の筆とりて
黃金の卷に刻むべく
世界歴史の靈よ起て、
今『光榮』は純白の
もすそを風に飄へし
波の緑の月桂の
冠さゝげて微笑むに。

※「アレキサンダー三世」

明治三十九年六月廿三日印刷
明治三十九年六月廿六日發行

東海遊子吟
定價金壹圓

著作者　土井林吉

發行兼印刷者　東京市京橋區銀座壹丁目二十二番地
大日本圖書株式會社
專務取締役　宮川保全

東京市京橋區銀座壹丁目二十二番地
大日本圖書株式會社

大阪市東區北久太郎町四丁目十七番屋敷
同支社

發賣所

各府縣下　特約販賣所

（株式會社東京堂地活版製造所印刷）

不許複製

文學士 淺野馮虛
文學士 戸澤姑射 共譯

沙翁全集

全部三十七卷
數月毎に一卷發刊

既刊

第一卷 ハムレット 價八拾五錢
第二卷 ロメオ、ヂュリエット 價八拾錢
第三卷 ヴェニスの商人 價八拾錢
第四卷 オセロ 價八拾五錢

郵稅 毎冊拾錢

定期刊行

帝國文學 毎月十日發行
定價拾五錢 郵稅壹錢

丁酉倫理會 倫理講演集 毎月十五日發行
定價拾貳錢 郵稅壹錢

教育研究 毎月一日發行
定價貳拾錢 郵稅壹錢五厘

東京 大日本圖書株式會社